
桜踏

日句狸雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜踏

【Nコード】

N8138B

【作者名】

日句狸雨

【あらすじ】

近未来を舞台に繰り広げられる、ごった煮、無節操なファンタジ

No. 0 ことのはじまり

世界中で空が鉛色の雲に覆われた日、とある生気の薄れた寂しい街は、にわかに慌ただしさを増していた。

そんな街の、だれも居ない狭い路地を駆ける人陰があった。現在この荒廃しきった街に住む唯一の人間でもある彼は、なぜか追われることになってしまったらしい。その後からは二人、ひどく息を切らしながらも懸命に彼を捕らえようと走っている。彼らの視界には、もう軽く腕を伸ばせば届いてしまうかもしれないところまで接近した、どう考えても子供にしか見えない“ターゲット”が映っていた。

何故か追われている俺。

数日前に出された避難勧告の後、俺自身もここ捨てて逃げるはずだった。まあ、聞いた話だと、何処もかしこも酷い有り様らしいが。とにかく、あの“雲”から遠ざからなければならなかった訳なのだが、どうも“あの餓鬼”が謀ったせいで、『お子様チケット』を失ってしまった。『お子様チケット』とはその名の通り、集団避難時に必要な、子供専用の整理券兼身分証明書なのだが、あいつはそれ無くしたらしく、近所に住んでいた幼なじみの俺にこう言ってきた。「俺のこれ、多分宝石だと思うんだけど……これとチケット、交換しない？ 中の情報は自分で書き換えるから。これ、売れば結構高いはずだし……」

もちろん初めは断った。しかし、その後も小一時間うるさく言われ続けた結果がこれだ。どう考えても、こんな石が高く売れるとは思えない。あの時承諾してしまった俺が馬鹿だったか。

それにしても、なぜ俺は追われているのか。さっきまでは、あのチケットが原因——俺のものだとバレたのではないかと思っていたが、まさかその程度の事でわざわざ俺を捕まえに来たわけがない。それに奴等は、「その珠をわたせ——」とか何とか怒鳴り散らしてい

るから、目的はこの石なのだろう。俺の中で、高く売れそうもないこの石は一連の流れから、完全に考えを変え、同時に、追っ手への興味を増幅させる結果となった。

追っ手の一人が人間離れした跳躍で俺に掛ってきた。これはかわす事ができず、そのまま顔を地面へと打ちつけた。完全に追っ手から覆い被さられ、抵抗しようにも四肢の動きを封じられて見動きが取れない。絶体絶命。もう一人は俺の腕を背中に回し、手錠を掛ける。もちろん子供サイズのものだ。首に何か鋭い痛みを感じた。次に心臓が脈打つ頃には意識が朦朧とし始め、数秒後には完全に意識が飛んでしまった。

「これでよし、か？」一人が呟く。

「ああ。」もう一人がそれに答えた。そして、子供を持ち上げ肩で担ごうとする、はずだった。その動作は直前で中断され、何かの気配を感じた様子で元々来た方向を見やった。

「やれやれ、気づかれたか……で、その子と……それに、その珠は俺の持ち物なんだ。返して貰おうか」

「な……！お前はッ……！ ああ………なんでお前がこんな所にいるんだよお！」目の前に現れた人物に対しての畏怖が感じられ、半ば諦観も含まれる。もう一人はというと、どうやら逃げたようだ。何とも正しい判断ではあるが、仲間を捨てて逃げるはどうかと思うな。

この男、危険につき……そんな感じの言葉が彼の存在を表現するのに相応しい。

「お前は逃げないのか？大分呼吸が乱れてきたようだが……そうしなくてもらった方が楽なんだ。逃げるなら早くしてくれよ、俺は面倒が

嫌いなんだ」苛立った様子で、相手を見ず、暗い空に向かって言った。

「お、俺だってなあ…逃げれるもんなら逃げたいんだよ！ お前を相手にしてたら、命が幾ら有ってもたりからなあ！」そう叫んだようだが、男はまだ空を見ていた。

「じゃあな、消えてくれ」

「は？…」

炎が見えた。彼はそう感じていた。割合そうなのだが、自らの身体の変異に気付く余地も無しに、地面に伏した。

「まあ、殺しちゃいけないけどな…」

そう言い残すと、男は珠と子供と共にこの場を去った。

N o. 1 (前書き)

酷く乱筆なので注意してください。

No. 1

徐々に目の前が暗くなってゆく。今朝食べたリンゴの味が、微かに口の中に残っている事に気がついた。ここ数日はまともな物をないな：こう云う時に限ってどうでもいい事を思い出す。だが、直ぐにその味も消えた。体中を電気が走り巡ったような感覚、痺れが四肢の感覚を消し去ってゆく。良く解らないが、自分を担いでいる男の声が聴こえてくる。何か、叫んでいるようだが：

瞼が何時もの何倍も重い。このまま閉じてしまっているのだろうか……。まばたきをした筈だった。案の定、瞼は閉じられたままになる。体の感覚が無くなる―意識が：体から抜け落ちたようだ。

淡い光が瞼を透して広がる。

深淵から意識が上がってきて、一瞬痙攣し、皮膚感覚が戻った。

目に映る景色はさっきまでとは一転していた。驚くべきことなのだが、そうする前に一つ、

「あんた、誰」

と、言ってしまった。

やはり、考えてしまう。本当に、コイツは何なのだろうか。ただのおっさんにしか見えないのだが、その姿からは何故か圧倒的なプレッシャーを感じる。

“コレ”は危ない。ほとんど反射的に、僅かに痺れが残る体を起こした。

「うおっ、いつ間に……とにかく、危ないところだった：あれは……」男はそう言くと、俺の右手を見た。

「それ、放した方がいいぞ。と言っても、もう手遅れか……」

手遅れ：言っていることの意味が解らない。とにかく、ここにはもう用がないのだ、さっさと逃げなくては。

「意味が解らないんだが…そんなことより俺、早くここを出たいんで。」

「ここを出るのはいいが、今、外なんて行ってみろ、十秒で凍死だぞ？」

凍死…そんな大袈裟な。この程度の雪で、それに、そこまで寒くもないし、むしろここは不自然な位あたたかいのだ。

…いや、あり得ない。こんな事は…。まず始めに、自分の神経を疑った。まだ、あの薬の作用か何かが残っているのかもしれない。そう考えるのが適当だ。

「あ、不思議だね？周りはこんなに寒そうなのに、ココは暖かい。実は俺たちの居るココは…簡単に言うのだな、“今”じゃない。」

「今…じゃない？」

「ああ、今じゃない。」

「さっきから意味がわからないことばかり…あんだ、一体何者？」

No. 2 とりあえず、自己紹介

彼の言っていることを、俺は理解できない。それはもう、支離滅裂ともとれる内容。物理学に疎い俺でも、それは「あり得ない」と断言出来た。しかし、あれだ。俺は実際に目撃もしている。あの炎というか火花が、真っ直ぐな軌跡を描いて追手の額を貫いたのを見ている。彼は、殺しはしないと言っていたが、脳に穴が開いて生きている人間を見たことが無い。多分、今頃は雪の下で静かに寝ているだろう。その事を彼に聞くと、こう言った。「あの人はあの位じゃ死なないから、心配しなくても大丈夫。」と。激しく的外した返答が返ってきたのだが、口調から察するに、どうやら俺を誑かす気も無いようで、こちらも特に問い詰めたりはしなかった。

「それで、俺はどうすれば？ 出ると死ぬなら……一生ここに居ろと？」そう聞くと、彼は少し考えさせろと言い、爪を弄り始めた。長くなりそうだったが、その予想は外れて、俺がため息一つ吐く間に終わったらしい。そして、こちらの顔を見もせずにボソリと、まるで独り言のように言った。

「まあ、多分大丈夫だと思うんだけど。」こんな感じに言ったのを俺は聞き逃さなかった。「大丈夫？ さっき死ぬとか何とか言わなかったか。」彼によると、凍死するらしい。しかし、それは、もう忘れてしまったかのような口ぶりである。不思議と自分でもそんな感じもしてきたし、もう訳がわからん。でも、冷静に考えろ。外の気温は摂氏－90℃だった筈。その時だった。彼に背中を向けていたのだが、その背中を明らかに蹴られたと分かるような強さで蹴られた。気付いた時にはもう視界はテントの外。ひたすら白い大地が広がっているのが一瞬見えた。そして、勢いよく前に倒れる。前回のように打ち付ける事こそ無いものの、顔を雪に埋めるのも嫌だ。とか言っている間に、顔に激痛が走る。

「冷た痛いっ！」と変な悲鳴を上げて、直ぐに立ち上がろうとした。顔どころか体の前面すべて埋まっているわけで、中途半端な痛みではない。

「ほら、大丈夫だろ？」背中越しにそう聞こえた。あいつか。確認のため、少し怒りも込めて後ろを振り向いた。

「お、怒ってるな。」と言いつつたところで奴の顔に雪球が直撃した。振り向き様に投げたやつが見事に当たったようだ。我ながら実に綺麗に入ったものだに関心してしまう。彼は直ぐに頭を軽く振って雪を払っているがこれでは何の意味も無い。今気がついたが、まるで極北の地を吹き荒ぶ吹雪から風を引いたような降りっぷりだ。積雪量80センチはあるぞ。子供の俺としてはしゃぎたい気持ちもある、しかし何せこの雪ではこれでは前に進むことも難しい。その場に突っ立て雪合戦をしてもあまり面白くないと思う。

「さて。」と彼は一息置く。そして語る。

「自己紹介がまだだったかな。」

確かに、色々あって忘れていたが彼は自分の素性を全く話していない。

「俺の名前は****。」

「は？ **……何だそれ？ そんな名前なのか？」

そう。それは人の名前というよりも機械の型式番号のそれだ。

「呼び難いなら『Tea』と呼んでくれて構わないから。お茶、ね。」

お茶、か。変だろう。しかしそれよりも――

「Tea……俺の名前が『丁^{てい}』で、うん、似てるな。」

俺の気の所為だろうか？ そんな事どうでもいいのだが、気になるな。

「そうかね？ なら頭文字だけで『T』でいいよ。丁くん。」

「それじゃもっとややこしいだろ。特に書いた場合に。それに発音も変わらない。」

わざと言ってるのだと思う。面倒な奴だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8138b/>

桜踏

2010年10月9日05時27分発行